大野城市歴史資料展示室　解説シート　考古 No.46

# 石器3（弥生時代）

大野城市教育委員会

## 1．弥生時代の石器のはじまり

弥生時代には、朝鮮半島から稲作や金属器が伝わったのはよく知られていますが、これらの他に、新しい種類の石器も伝わってきました。これは、縄文時代までの石を叩いて作っていた「打製石器」とは違い、磨いて作ったもので、「磨製石器」と呼ばれています。これらの石器は、狩りや稲作、伐採、祭祀など多くの場面で使用されました。

ただ、弥生時代の人々は、朝鮮半島から伝わってきた磨製石器をそのまま使ったわけではありませんでした。各地域で必要なものだけを受け入れたり、形を日本独自のものに変化させたりしました。また、弥生時代の石器は、縄文時代と比べて種類が増えています。中でも農具の出現は、今までの狩猟・採集中心の生活に、新たに農耕が加わったことを示していると言えます。

さらに、縄文時代に見られた打製石器も、引き続き使われていました。このような点が、弥生文化の特徴の一つとなっています。

## 2．弥生時代の石器の種類

大野城市でも弥生時代の石器はたくさん発見されています。特に、仲島遺跡や中・寺尾遺跡など、市内北部の御笠川流域の遺跡からは数多く見つかっています。

### ◇農耕や土地の開発に使用した道具

**石庖丁**（穂摘具）

稲の穂を刈り取るためのもので、半月形や木の葉形をしているものがほとんどです。一部は、飯塚市の立岩遺跡で生産され、北部九州を中心として流通していたことがわかっています。

**石斧**（伐採、加工用）

木を切るための伐採石斧と、木材を削ってものを作るための加工石斧の二種類があります。伐採石斧の一部は、福岡市の今山遺跡で生産されたものが、北部九州全域に流通していたことがわかっています。

このほか、農耕に関係する道具としては、石庖丁と同じく、稲を刈り取るためのものとされている石鎌があります。石鎌は、壱岐や山口県西部を中心に使われていました。

### ◇狩猟・戦いなどに用いた道具

**磨製石鏃**（狩猟・戦い用）

石を磨いて矢じりにしたものです。打製石鏃とは違う種類の石を使って作られており、厚さ数㎜と非常に薄く、きれいに磨かれています。中には、お墓に副葬されるものもあり、多くの地域で使用されていました。

**石剣・石戈**（戦い・祭祀用）

武器の形をした石器で、銅剣や銅戈をまねして作ったと考えられるものがあります。戦いに使用可能なものの他に、祭祀用と考えられる例もあり、お墓に副葬されたものが見つかっています。北部九州を中心として使用されていました。

### ◇モノを作るための道具

**紡錘車**（糸を作るためのもの）

植物の繊維から糸をつくるとき、その糸を巻き取る棒が回転しやすくなるようにつけるものです。中央の穴に棒をさし、くるくる回して使いました。石で作られたものの他に、土や骨で作られたものもあります。

**砥石**（石器を作ったり、金属器を磨いたりするためのもの）

上に挙げたような石器や金属器を研ぐためのものです。現在と同様に砥石の目の粗いものから細かいものがあり、置いて使うものと持ち運び可能なものがありました。

この他に、縄文時代から存在している打製石鏃や石匙・石錐なども、引き続き使われていました（解説シート『石器2』参照）。つまり、弥生時代には、打製石器と磨製石器の両方を使っており、たくさんの種類があったといえます。

弥生時代には、農耕が本格的に始まったことで、狩猟・採集中心の生活が大きく変化することとなりました。その結果、それぞれの場面にあうような、多様な道具が必要になったと考えられます。

## 3．石器の終わり

種類が豊富になった石器でしたが、弥生時代とともに終わりを迎えてしまいます。弥生時代後期（約1950年前）になり、鉄器が広がり始めると、徐々に道具としての役割を鉄器に譲るようになり、量が少なくなります。例えば、狩猟や戦い用は石鏃から鉄鏃へ、穂摘具は石庖丁から鉄鎌へ、伐採用は石斧から鉄斧へと変わります。そして、古墳時代に入る頃（約1750年前）には、砥石や紡錘車を除き、磨製・打製にかかわらず、ほとんどの石器が姿を消してしまいました。旧石器時代から数万年以上続いた石器はここに終わりを迎え、鉄器中心の新たな時代へと変わったのです。